

原著 (Article)

# オーストラリアと日本の小学校音楽科の比較研究 その2

——音楽の授業の比較から——

**Comparison of Australian and Japanese Primary School  
Music Classes (Part 2): Focus on Music Class Activity**

山田 真紀\*  
YAMADA, Maki\*

キーワード：音楽の授業，小学校，日本，オーストラリア，参与観察，国際比較

Key words: music class, primary school, Japan, Australia, participant observation,  
comparative study

## はじめに

前稿の「オーストラリアと日本の小学校音楽科の比較研究 その1—音楽の国家カリキュラムの比較から—」では、オーストラリアと日本の国家カリキュラムの比較を行い、①日本は音楽を通して音楽の知識や技能を育てるだけでなく、情操や感性という人間形成を図ることもその目的としているのに対し、オーストラリアでは音楽の知識や技能を段階的に育てることを目的とすること、②オーストラリアでは子ども達は「作曲家」「演奏家」「聴衆」の3役割をもって音楽の授業に参加することが求められ、特に「作曲家」として音楽づくりに携わることで、音楽の基礎や知識を自ら求めているような仕組みになっていること、③両国において音楽を通して多様な文化に触れることが推奨されるが、オーストラリアでは、多文化に触れることだけでなく、音楽のもつ文化的・社会的・歴史的背景についての理解を深めることも目的とすること、などを明らかにしてきた<sup>1)</sup>。これらの国家カリキュラムの特徴は、学校の日々の実践にどう反映されているのだろうか。

近年、オーストラリアの音楽科の授業については、研究が蓄積されている。唐崎は、オーストラリアの音楽科が「芸術」という統合カリキュラムのひとつの下位領域に位置づけられていることに注目し、各州においてどのような形で芸術の諸領域が「統合」されているのかの研究を積み重ねている<sup>2)</sup>。また井内は、実際に行われている音楽の授業に少しでも近づくために、楽典の基礎がどのような方法論で、どのように段階的に教授されているのかを教科書（指導書）を参照しながら分析している<sup>3)</sup>。ただし、オーストラリアには日本の検定教科書のようなものではなく、参考書のような位置づけであり、さらに教科書を用いない授業も多い。

以上のように、研究の蓄積が進んでいるものの、実際にオーストラリアの音楽の授

業の様子を紹介する研究はない。そこで、筆者は、オーストラリアと日本の小学校を訪れ、音楽の授業を参観させてもらうことにした。本稿では、参観した授業の様子を紹介し、両国の授業の特徴について考察していく。もちろん教師によって実践はさまざまであり、このふたりの教師による実践は、両国の音楽の授業を代表するものではない。しかしながら研究の進展のためには、参与観察したデータを積み上げていくことが大切であり、同じ関心をもつ研究者とデータを共有するために、ここにデータを公開することにしたい。

## 1. オーストラリア連邦のシドニー市で参観した音楽の授業

筆者は、シドニー市内の南西部にあるM地区にあるA小学校で音楽の授業を参観することができた。A小学校は児童数約600名で、約半数の児童が英語以外の言語的バックグラウンドをもつ多文化状況にある小学校である。現在、シドニーは移民の流入が激しく、どの公立学校においても児童数が年々増加しており、児童数の増加に対応するために、プレハブ教室を敷地内に立てている。A小学校の音楽室は、プレハブ教室群の一番端にあるプレハブ教室である（写真1と写真2を参照）。A小学校では週に1回、45分間の音楽の授業がある。高学年（4・5・6年生）では、音楽の専科の先生が木曜日と金曜日に来て、すべてのクラスの音楽の授業を担当している。低学年は別の専科の先生が担当している。6年生は3クラス、5年生も3クラスあり、今回、筆者は6年生と5年生のそれぞれ1クラスの音楽の授業を参観した。

### (1) オーストラリアで参観した音楽の授業 その1

日時：平成26年8月21日(木)3時間目（10時40分～11時25分の45分間）

場所：オーストラリア連邦シドニー市、市内南西部にある公立A小学校

観察対象：6年生（リズムと合唱）

授業者：音楽の専科教員、非常勤講師、B先生（50代の女性教諭）

#### 10時40分

授業時間になると担任教師の引率により、6年生の1クラスが2列になって音楽のプレハブ教室にやってくる。児童は「おはようございます、B先生」と挨拶しながら教室に入る。教室は児童のおしゃべりでがやがやしている。先生が、パンパンパパンと手拍子をする、児童も同じようにパンパンパパンと手拍子をし、静かになる。この手拍子は静かになるための合図のようである。教室が静かになると、先生は元気な声で、「はい！ みなさん。始めましょう。それでは、一度、全員で通してやってみますね。この前のように円になって！」と指示する。児童は円になる。

先生が「さんはい！」と号令をかけると、児童はボディーパーカッションを始める。「ドンドカドドダン、ドンドカドドダン」というリズムにあわせて、手をたたいたり、足踏みしたり、手で足をたたいたりして、全身を使ってダンスするように音を出す。途中からリズム

が変わる。児童は複数のグループに分かれているようで、途中からグループごとに異なる動きを見せ始める。それにともない、リズムと音は重層的となる。B先生はそれぞれのグループの前に立ちながら、模範を示す。3分ほどで一通りの演技が終わる。

先生：「はい、なかなか良くなってきていますよ。まず手のたたき方ですけど、カップでポコポコ音を出すのはダメですよ（悪い例を示す）。手のひらを打ち付けるようにして、パチパチ音を出してください。」先生がよい例を示すと、児童も数名、そのように手をパチパチ鳴らす。

先生：「足の音の出し方も、つま先だけ、とか踵だけではなく（悪い例を示す）、足裏全体を床に打ち付ける感じで音を出しますよ。」先生がよい例を示すと、児童も数名、先生の真似をしてドカドカ足を踏み鳴らす。

先生：「それではみんな、その場に座ってください。今度はグループごとにやってみます。じゃ、まずこの辺りの子立って！ さんはい！」指示を受けた5～6人だけがその場に立ち、先生の模範を見ながらボディーパーカッションを行う。先生：「はい、じゃあ次はこの辺りの子。」このようにして、児童を5グループに分けて、それぞれ演技させ、座っている児童にはそれを鑑賞させる。

#### 10時54分

先生：「はい、それでは今度はグループごとに隊形の確認をしていきます。Aグループの子だけ残って、他の子は教室の壁際に移動してください。」児童は教室の壁際に置いてある椅子に座ったり、床に座ったりする。Aグループの10人ほどが、教室の中央に集められる。

先生：「グループAは矢の形になりますよ。前がこちらでまず4人が立ちます。その後ろに人と人の間に立つような感じで3人が立つ。（児童の腕をひっぱって、正しい位置に立たせながら説明する。）そしてその後ろにふたり、最後にひとり。はいこの隊形で、一度やってみますね。」前方に立った女児は動きが大きく、上手にボディーパーカッションしているように見える。後ろの方の男児2名は、十分には動きを習得できていない様子である。先生は隊列の一番前で模範を示している。一通りAグループの演技が終わる。

先生：「はい、それではAグループの人は、外で自主的に練習をしてきてください。次はBグループの人、前に出てきて！」Aグループの児童はプレハブ教室の前の広場に出ていく。先ほど一番前で元気よく踊っていた女児がリーダーシップを発揮し、他の児童を先ほどの隊形に並ばせている。教室ではBグループが隊形を組む。

先生：「Bグループは、5人ずつ2列、そして最後に3人。一番前にひとり、という形になります。一番前をやりたい人はいますか？」児童の数名が挙手をする。

先生：「それでは〇〇さん、あなたにお願いするわ。」指名された女児は嬉しそうに小躍りしながら一番前に出てくる。先生は「あなたは、ここ。あなたはもう少し前……」と生徒の腕をつかみながら正しい場所に立たせる。外で練習していたAグループでトラブルが発生したようである。女児たちは真剣に練習しようとしているのに、一部の男児がふざけて追いかけてこを始めたようだ。女児が「先生～！ 〇〇君がふざけて言うことを聞いてくれない」と相談にやってくる。先生は、Bグループをその場に残し、外へ出ていき、ふざけている男児を注意する。先生はすぐに戻ってくる。Bグループの通し練習をする。動きはAもBもCも同じであるが、輪唱のようにBはAよりも遅れて入るようである。何度か拍をおいてから、ボディーパーカッションを始める。一通りBグループの演技が終わる。

先生：「はい、手はいつも後ろに下げたから終わるのよ。手は大きく円を描くように動かします（模範演技をしながら説明する）。はい、それではBグループも外で練習していっていい。遊ぶ時間ではありませんからね。しっかり練習するように。あとで練習の成果を発表してもらいます。さあ、Cグループさんお待ちせしました。Cグループは円になって、まんなかに代表の子が立つようにしましょう。真ん中をやりたい子はいますか？」3人が元よく拳手する。

先生：「それでは〇〇ちゃんにお願いすることにするわ。それでは、Cグループは円になって、中心の〇〇ちゃんの方を見ましょう。」Cグループも一通り演技をする。

#### 11時4分

先生は外に出て練習していた児童を呼び戻す。全員教室に戻ってくる。

先生：「はい、それではこれからグループで、練習の成果を発表してもらいます。こちらが前ですからね。先ほど決めた隊形になってやってみてください。はい、まずAグループ！」Aグループ、Bグループ、Cグループと演技を披露する。途中、4人の男児がトイレのために教室から出ていく。（オーストラリアの小学校では、授業中にトイレに立つ場合、安全上の配慮からひとりでトイレに行ってはいけない決まりとなっている。）

#### 11時15分

Cグループの発表が終わり、教室が児童のおしゃべりでがやがやする。先生はまたパンパンパパンと手拍子をする、児童も同じリズムで手拍子をして、少し静かになる。先生：「それでは最後に歌の練習をしましょう。みなさん、ピアノの周りに集まって。」

ホワイトボードにはナヌマというアフリカ発祥の歌の楽譜と歌詞が映し出されている。先生のピアノの伴奏と歌に合わせ、全員でナヌマを歌う。歌の途中で先ほどトイレに立った4人の男児が教室に戻り、壁際においてある椅子に座り、みんなが歌を歌っているのを見ている。最後まで歌い終わると、先生は「入っていいですよ」と指示し、4人はピアノの周りにいる児童に加わる。

先生：「もうメロディーと歌詞は覚えたわよね。それでは、2つのグループに分けて輪唱を試みようと思います。じゃあ、〇〇君よりも右側に座っているみなさんは第一グループ、左側に座っているみなさんは第二グループです。」「私はどちらのグループですか」と聞く児童が数人いたので、どちらのグループに属するか指示する。

先生：「それでは第一グループから歌います。次の小節から第二グループが加わってくださいね」先生はまた伴奏を弾き、第一グループから歌いはじめる。途中から第二グループが加わり輪唱となる。

先生：「はい、ちょっとお互いにつられちゃっている人がいますね。ハーモニーを感じながら自分のパートをしっかり歌ってね。じゃあ、今度は第二グループが先に歌おうかな。」第一と第二のグループを入れ替えて、もう一度、輪唱する。授業終了のブザーが鳴る。

先生：「はい、それでは、今日はこれでおしまいです。来週はボディーパーカッションを3グループ合わせてやっていきますので、よく覚えておいてくださいね。」

教室の外に担任の教師が待っている。児童は我さきに音楽教室から出ていく。

11時25分に授業終了

授業後にB先生にインタビューを行う。

山田：「今日の授業の目的は何ですか？」

B先生：「ボディーパーカッションを通して、複数のリズム Multiple rhythm に親しむことを目的としています。1学期はだいたい12週間あって、学期の最後に音楽祭 music performance day があるのです。NSW 州の教育省の音楽部門が予算を出してくれるので、多くの学校で行われています。保護者からの資金集め fund raising の場にもなります。子ども達はクラスごとにその学期に学んだパフォーマンスを披露します。音楽の授業は週に1回で45分間だけなので、1学期に12回しか授業がない、ということになります。なので、音楽祭で演じるパフォーマンスを12回かけて完成させていく、という形で授業を組み立てています。12回って多いようで少なくて、ある程度の質のパフォーマンスを作り出すのは大変なのです。音楽祭に出るというので、子ども達も頑張って練習します。」

山田：「最後に歌ったナヌマという歌にはどんな意味があるのですか？」

B先生：「この曲はアフリカの歌で、とてもメロディーが美しく、またそれほど難しい曲ではないので、今学期、全学年で練習しています。音楽祭では全学年で輪唱するつもりです。小学生用の歌唱曲を集めたサイトがあって、アカウントを持っているので、楽譜はそこからダウンロードしています。」(写真3参照)

山田：「他の学年はどのようなことに挑戦しているのですか？」

B先生：「5年生は楽器を使ったパフォーマンス、4年生はリコーダーを使った演奏をしています。5年生は木琴と鉄琴とアフリカの太鼓を使ったパフォーマンスです。明日の午前中に授業があるので、ぜひ見に来てください。」

## (2) オーストラリアで参観した音楽の授業 その2

日時：平成26年8月22日(金)2時間目(9時45分～10時30分の45分間)

場所：オーストラリア連邦シドニー市、市内南西部にある公立A小学校

観察対象：5年生(木琴と鉄琴とアフリカの太鼓の演奏)

授業者：50代の女性教諭(B先生)

### 9時45分

授業時間になると担任教師の引率により、5年生の1クラスが2列になって音楽のプレハブ教室にやってくる。今日は読書週間 Book week のお祭りの日なので、先生も児童もコスプレをしている。オーストラリア NSW 州の学校では8月の第三週が読書週間と定められており、中古の本のバザーが開かれたり、本の読み聞かせのイベントがあったりと、読書を奨励するイベントが学校内外で盛んに行われる。小学校では、読書週間の1日をお祭りの日と定め、本の主人公のコスチュームを着て登校することになっている。スーパーマンやハリーポッター、魔女、お姫様など、さまざまに着飾った児童たち。引率の女性の先生も、ピンク色のドレスを着て、キラキラ光るティアラをつけ、お姫様になっている。このような服装であるためか、児童は少し落ち着きがない。先生は「あら、素敵ね!」「これは何の衣装なのかしら」など、児童のコスプレにコメントをしながら、みなが教室に入ってくるのを出迎えている。

先生：「それでは、自分の楽器を持って、いつもの場所に座ってください」と指示をする。太鼓担当は3名で教室の壁際においてある椅子に腰かけ、鉄琴担当は4名で、鉄琴を台座に



乗せ、その後ろに椅子を持ってきて着席する。教室の中央には、木琴の第一グループ12名と第二グループ13名が床に楽器を置き、その後ろに座る。教室の前方にあるホワイトボードには、楽譜が映し出される。数人の児童が楽器をたたき始め、教室は騒がしくなる。先生は、バチを脇の下にはさむようにジェスチャーで指示をする。それでも音を出し続けている2名の児童から、バチを取り上げる。

先生：「それでは、一度、通しでやってみますよ。みんな自分のパートを覚えていますね。それでは、さんはい！」みんなは一通り、演奏をする。まだよく覚えておらず、隣の子の演奏を真似しながらなんとか演奏している子もいる。自分が演奏していないパートはバチで拍子を取ったり、リズムにあわせて体を動かしたりして踊る。演奏というよりパフォーマンスである。

先生：「あれ〜、まだ基本的な音を覚えていない子がいるみたいですね。一度、声に出して歌ってみて。」児童は口々に「E・C・E・C・E・D・D！」と楽譜を読む。(オーストラリアでは楽譜をドレミではなく、CDEFGとアルファベットで読む。)

先生：「そうですね。まだ覚えていない子、大丈夫？ 一度、練習してみてください。」児童は各自で自分のパートを練習する。まだ完全に覚えていない子は、隣の子に教えてもらっている。その間、先生はパソコンの準備をし、ホワイトボードに You tube の映像を映し出す。

先生：「はい、やめて！ ホワイトボードを見てくださいね。(教室全体が静かになるのを待つ。)」はい、この映像は、みんなと同じくらいの子も達が演奏しているものです。ちょっと見てみましょうね。」先生は映像を流す。

先生：「学期末の音楽祭では、みなさんもこんな感じで演奏することになります。さあ、それではパートごとに演奏してみましょう。まずは太鼓のチームから。他のチームが演奏しているときには音を出してはいけません。バチを手から離して床に置きなさい。他のチームの演奏をよく聞いていてくださいね。」太鼓のチームが演奏する。先生はひとりの児童から太鼓を受け取ると、模範演奏をする。そして次に児童たちが先生と一緒に太鼓をたたく。そして最後に子ども達だけで演奏させる。

先生：「間奏のときは、自分でアレンジして自由にたたいていいですからね。ちょっと〇〇ちゃん、やってみて。」指名された女児が、恥ずかしそうに自分のアレンジでたたいてみる。あまりうまくたたけていないようだ。先生も「う〜ん」という表情をして、例えばこんな感じは？ というように3種類のリズムを示す。その後、鉄琴、木琴の第一グループ、木琴の第二グループの順に、演奏をしていく。

先ほどのお姫様のコスチュームを着た担任の先生が、音楽の授業の様子を見学にくる。先生：「担任の〇〇先生が来てくれました。あ、〇〇先生じゃなくて、今日は雪の女王かしら？ せっかく来てくださったので、今まで練習してきたパフォーマンスを見ていただきましょう。準備は静かにしますよ」といい、もう一度、全体で合わせて演奏する。演奏が終わると担任の先生は、嬉しそうに拍手をする。そして「みんな頑張ってるね！」と言い残すと教室から出ていく。もう一度、通して演奏を試みる。

先生：「はい、演奏が終わったらふらふらしな。声を出さない。みんなで立ち上がってお辞儀をします。お辞儀はしっかり体を曲げて、まあなんて素敵な靴なのでしょう、って自分の靴を眺めてから顔を上げてくださいね。はい、最後のところだけ、もう一度、やってみますよ。」最後のフレーズを演奏して、お辞儀までやる。

先生：「はい，太鼓のソロのところはもっと自分なりに工夫してくださいね。来週までによく考えてきて。はい，それでは，楽器を元あった場所に戻し，ピアノの周りに集まってください。」児童は楽器を片付けると，ピアノの周りに集まる。

### 10時20分

ホワイトボードにはまたナヌマの楽譜が映し出される。

先生：「はい，姿勢を正して。肺にたくさん空気を入れるようにして発声しますよ。先生が歌ったら，真似して歌ってくださいね。」先生はピアノ伴奏をつけながら，ひとフレーズだけ歌う。そして児童は追いかけるようにそのフレーズを歌う。先生は次のフレーズを歌う，というように少しずつメロディーと歌詞を覚えていく。一通り最後までいったら，今度は先生と児童が一緒に通して歌う。途中，落ち着きがなく，きちんと歌っていない男児がいると，先生は「後ろの椅子に座ってらっしゃい」と移動するように指示する。男児は教室の壁際に置いてある椅子（先ほど太鼓の子ども達が座っていた椅子）に腰かけ，みなが歌っているのを見ている。ふたりの男児がトイレに立つ。次に児童だけで歌う。

先生：「それではふたつのグループに分けて歌ってみようと思います。〇〇さんよりこっちに座っている人は第一グループ，〇〇さんよりこっちは第二グループ。あなたは第一ね。あなたは第二に入って。」まずは，第一グループが歌う。ふざけて歌っていない男児を見つけると，曲を途中で止めて注意する。もう一度，歌い直す。ひとりの児童を「〇〇さん，とても素晴らしいわ」と褒める。グループごとに歌い，聞きあう。片方のグループが歌い終わると拍手が起きる。

先生：「それでは，輪唱に挑戦してみます。第一グループから歌い始め，第二グループは次の小節から入ってくださいね。」先生は歌の途中で「ハーモニーを感じて！」と声をかける。



写真1 プレハブの音楽教室



写真2 音楽教室の内部

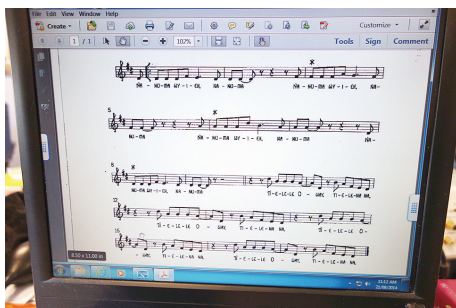


写真3 ダウンロードしたナヌマの楽譜



写真4 児童が演奏した木琴・鉄琴・太鼓

### 10時28分

先生：「それでは、ホワイトボードの前へどうぞ。」児童は我さきにとホワイトボードの前に集まる。ホワイトボードにくっつかんばかりに座り、みんなとても嬉しそうである。

先生：「最後にみんなが頑張ったご褒美に、みんなの大好きなポピュラー音楽を聴きましょうね」といい、今、オーストラリアで流行している歌を You tube の動画を用いて流す。児童は嬉しそうに一緒に歌う。

### 10時30分

先生：「はい、それでは、今日はこれでおしまい。」児童は迎えに来た担任の先生とともに教室に戻っていく。

## 2. 日本の名古屋市で参観した音楽の授業

日本では名古屋市長X小学校の4年生の音楽の授業を参観することができた。X小学校は、都心に近い児童数約220名の小規模な小学校である。日本でも音楽は専科の教員が担当することが多く、高学年になるとその傾向は高くなるが、参観した音楽の授業はクラス担任が行っていた。X小学校では、音楽の専科と図画工作の専科を選択でき、見学したクラスの担任は音楽が得意なことから、図画工作を専科にお願いしているという。

### (1) 日本で参観した音楽の授業

平成26年9月18日(休)2時間目

名古屋市長X小学校 音楽室

音楽；4年生 单元名「せんりつと音色」

授業者：担任の教諭 Y先生（20代後半の女性教師）

#### 9時45分：授業開始

児童は音楽の教科書と筆箱とリコーダーを手にもち、音楽室に集まってくる。全員が着席したのを確認して、先生が日直に合図する。

日直：「これから2時間目の授業をはじめます。礼！」と号令をかけると、児童は椅子に座ったまま姿勢を正し、礼をして「お願いします！」と言う。

先生：「はい！ それでは、いつものように発声練習から始めましょう。最初はハでいくよ。手をほっぺにあてて、ほっぺをあげる気持ちで歌ってください。4人組でお互いにチェックしながら声を出していきましょう。」児童はその場に立ち、4人組で互いの顔を見ながら、手を頬にあてて、先生のピアノの伴奏に合わせながらハの音で歌を歌う。

先生：「は〜い、それでは今度はホでいくよ。今度は、体をまっすぐにして、手はほっぺにあててね。時計を見てね！」先生のピアノの伴奏に合わせながら、今度は同じメロディーをホで歌う。全体的に声はよく出ていて、きれいな響きを効かせている。

先生：「はい、今度は高い音が出てきますよ〜。高い音はどうするんだった？」児童は腕を



鍛えるゴムを左右に引くようなジェスチャーをする。先生もそのジェスチャーをしながら「そうね、こうだったよね。高音が出にくいと思う子は、これやってみてね。曲の雰囲気を大切に歌い方を工夫しましょう。」

今度は、エーデルワイスをホの音だけで歌う。

先生：「はい、いいですね！ それでは座ってください。」先生は手にプリントをもつ。

先生：「はい、このプリント、今日持ってきた人～。あら、少ないね。じゃあ、持ってこなかった人には、もう一度配りますので、教科書にはさんでなくさないようにね。2学期はずっと使いますので。音符の読みがまだ不安っていう人は、このプリントを見てね。いつも音楽の授業のときには持ってきてくださいね。持ってきていない人は手をあげて待っていてね。」先生は手をあげている児童にプリントを配っていく。児童はプリントを受け取ると、そこに自分の名前を書く。

先生：「はい、それじゃあ、手を出してください。あの時計の秒針にあわせて手をたたきますよ。さんはい！」児童は、秒針を見ながら、秒針が動くたびに手をたたく。先生は児童の拍の中間で手をたたく。

先生：「ねえ、今、先生が何をやっているか分かる人？」数名が挙手する。先生は男児を指名する。

男児：「針が動いた後に手をたたいている。」先生：「そうだね。ほかには？」女児を指名。

女児：「みんなが手をたたいたちょうど真ん中で手をたたいている。」先生：「近くなってきた！ ほかに？」男児を指名。男児：「半秒ずつ！ 0.5秒?! 1秒の半分！」先生：「そうですね！ ちょうど1秒の半分のところで先生、手をたたいています。じゃあ、今度は先生が1秒ごとに手をたたくから、みんなはちょうど半分のところでたたいてみて。」先生が手をたたくと、児童はその間に手をたたく。

先生：「それでは、列ごとにやってみます。最初はこちら側から」北側に座っている10名がやる。

先生：「はい、いいですね。今度は真ん中の列。ここは多いから、最初は前に座っている10名がやります。ここまでの10人ね。」中央列前方に座っている10名がやる。

先生：「それでは後半の7人いくよ！」中央列後方に座っている7名がやる。

先生：「それではこちらの列いくよ！」南側の列に座っている8名がやる。

先生は、タンタンといいながら手をたたいている。

### 10時10分

先生：「今度は、2人組になってください。ゆっくりだと簡単だよ。早くやるとどうなるかな。だんだん難しくなるよ。2人組でどれだけ早くできるか、やってみてください。隣同士で2人組になれるところは、そこでやってね。え～と、ひとりの〇〇君は、〇〇さんとやろう。〇〇君はペアがいらないから、先生とやります。」しばらく練習をする。

先生：「は～い、さん、に、いち！」といいながら、指で数字を作る。教室が静かになる。

先生：「はいそれでは、2人組で発表してくれる人！」5～6名が挙手する。2組が発表をする。

先生：「はい、もう1組くらいに発表してもらいたいんだけど……。2人組で手をあげているところはあるかな？……いないね。じゃあ、手をあげているふたりで、即席でやってもらいましょう」ちょっと離れたところに座っている女児ふたりが即興で挑戦する。

先生：「はい、いいです。今日の授業はリズムの話から始めます。」黒板にト音記号と「4分の4」の分数を書く。

先生：「これは何と読みますか？」数人が挙手する。女兒を指名する。女兒：「4分の4拍子です。」

先生：「はい、4分音符がいくつ分ということ？」女兒：「4つ分。」リコーダーの音がする。

先生：「リコーダーの音がする。リコーダーはしまってください。はい、しまうっていうのはどういう意味ですか？ 袋をいじることではないよ。すぐにしまいなさい。」数名の男児がリコーダーをケースにしまう。先生は「4分の4」の分数の横に4分音符を4つ分書く。4つの4分音符の下にそれぞれタンと書く。

先生：「さっき2人組でやったのは、タンのなかに2つ分入っているやつなので。」先生は4分音符の下に、2つの8分音符を書く。その下にそれぞれタと書く。8つの8分音符を書く。

先生：「この音符の名前を分かる人いる？」数名の児童：「8分音符！」

先生：「そう！ 8分音符。今、8つ音符が書いてあるでしょ。だから8分音符といいます。これ全部書くと大変だから、4つまでつなげて書くことができます。」つなげたバージョンを書く。さらに、「この8分音符を半分に分けることもできます」と言いながら8分音符の下にふたつの16分音符を書く。先生：「この音符の名前は、分かる人いる？」数名の児童：「16分音符！」

先生：「ちょっと書くのが大変なんだけど、4つを2つに分けると8つ、さらにそれを2つに分けると16個になるから、16分音符ね。これも全部書くと大変だから4つまではつなげることができます。」男児：「じゃあ、次は32分音符？」

先生：「そう、そういうものもあるけれど、ここではやりません。」

男児：「じゃあ、64分音符もあるの？」先生：「そういうものもあるよ。」

男児：「32分音符だったら旗は3本？」先生：「そう。」

男児：「64分音符だったら旗は4本だね！」

先生：「そうなりますね。でもそこまでは教科書に載っていないので、そこまではやりません。はい、音符の読み方を覚えましょう。4分音符はタン、と読みます。8分音符はタ、16分音符は2つ合わせてティリです。ティリティリティリティリと（手をたたきながら）表現します。さへて、これがリズムの基本なんだけど、実はいろんなリズムがあります。今日配ったプリントを見てくれる？（参考資料1を参照）。最初のものは、2本目の棒が消えてないよね。だから、これは4つ目の16分音符が3つ目のとくつついて、8分音符になっていることを意味しています。読み方は、ティーリです。2番目のは、真ん中の音符のまわりにだけ棒が消えて見えなくなっているものです。3番目にあったはずの音符が2番目のやつにくつついちゃっているのね。読み方はティリーリとなります。3番目のやつは、最初の音符が付点8分音符になっているでしょ。だから2番目と3番目の8分音符が全部、1番目の8分音符にくつついちゃったのね。読み方はティーティリとなります。手でたたくとこんな感じ。（ティーティリといいながら手をたたく。あれ？ っとちょっと先生も混乱する。）ちょっと難しいかな。2学期を通じてやっていきますからね。こんなリズムもあるよ～ということ覚えておいてもらえるといいです。」

#### 10時23分

先生：「お待たせしました。リコーダーをしましょう。」みんなはリコーダーをケースから出

す。先生：「ハローサミングやっていきますよ。教科書開いてね。じゃあ、1回、通しでやってみますよ。」先生の伴奏とともに、1度通して演奏してみる。うまく吹けない児童も多い。演奏後もピーピー音が出ている。

先生：「はい、ちょっとリコーダーを口から外してください。ちょっとドレミで歌ってみましょう。」先生の伴奏とともに、ドレミで歌う。(教科書の音符にドレミを鉛筆書きしている子もいる。)

先生：「最後のところだけいくよ。まず先生が歌うよ。」先生が見事な声で歌う。

先生：「じゃあ、最後のところいくね。歌うだけよ〜。リコーダーはまだ。」先生と児童で最後のところをドレミで歌う。先生：「はい、今日は後半部分をやっていきます。じゃあ、まず普通のミを出してみてください。」児童はリコーダーでミの音を出す。

先生：「はい、後ろの穴、爪でちょっとだけ開けてみて。」先生は、爪で半分だけ開ける様子を児童に見せて回る。児童は「高いミ」を出そうと練習する。先生が、黒板を左右に開くと、下から五線譜があらわれ、1オクターブ高いミの音符を書く。

先生：「それではまた場所ごとに吹いてみますよ。それではこの列。」北側の列の児童が高いミの音を出す。先生：「はいそれでは、真ん中の列の前」「次に、真ん中の列の後ろ」「最後にこの列」と順番に高いミの音を吹かせる。

先生：「はい、今、合格だといえるのはたった3人だけ。どういう人が合格か、分かった人手をあげて！」3人、児童が挙手をし、女児が指名される。

児童：「姿勢……？」

先生：「はい、その通り！ 姿勢です。ひじを机につけていたらいけないし、脇を開け過ぎの人も（ひじをあげて、脇の開け過ぎの例を示す）、脇を閉め過ぎの人も（ひじを体にくっつけて脇の閉め過ぎの例を示す）ダメです。それでは、正しい姿勢で、みんなで高いミの音を出してみましょう。どうしても出ないっていう人は、リコーダーを上げて、強く吹くと出ますからやってみて。」全員で高いミの音を出してみる。

先生：「それでは、最後までもう一度やってみましょう。」もう一度、通して吹いてみる。先生：「次回は、もう一度、最後までやって、ハローサミングを仕上げて、次、“もののけ姫”をやりますからね。」児童から「やったー」と喜ぶ声が聞こえる。

先生：「それでは、終わりにします。」ピアノで「じゃん」と音を出す。児童は立ち上がる。

先生：「リコーダー、きちんとクリームつけておいてくださいね。」児童からは、「あ〜忘れてた」というざわめきが起きる。先生：「さあ、挨拶！」

日直：「これで2時間目の授業を終わりにします。」児童はピアノの音とともに礼をする。児童は「先生、今のピアノの音、ちょっとおかしかったよ」などと先生に声をかけながら、音楽室から出ていく。

授業終了後にY先生にインタビューを行う。

山田：「この授業で大切にされていたことは何ですか。」

先生：「今日は授業参観だったので、親御さんに子ども達が楽しみながら音楽の学習に取り組んでいる様子を見ていただければ、と思い、授業を組み立てました。授業を通して、歌唱やリコーダーの演奏の技術や、旋律とリズムの知識を身につけるだけでなく、楽しく歌ったり、演奏することを通して、音楽を楽しむ気持ちを育てたり、子ども達の感性を育てたりし

たいと思っています。」

山田：「旋律とリズムの学習では、子ども達が発展的に考え、盛んに意見を出していた様子が印象的でした。」

先生：「16分音符を、今日はティリティリと読む、というふうに教えましたけれど、カカカカやチチチチと表記されていることもあります。今日は子ども達に親しみやすく、リズムを

**おんがく**

ト音記号

ド レ ミ ファ ソ ラ シ ド  
(F) (C) (E) (A $\flat$ ) (G) (B $\flat$ ) (D $\sharp$ )

☆リズムのきほん☆

① ② ③ ④

⑨- ⇒ 4/4 タンタンタン

① ② ③ ④

⑨- ※1

※1 「ターアーアー」と発声する

こんなのもあるよ!

⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ※2 「ターアー」と発声する

ターー タン

⑨- タン タン タン

⑦ ⑧

⑨- ⑪ ※3

※3 「カカカカ」と発声する

⑩ リ  
⑨ リ ⑩ リ )

⑩ リ  
⑨ リ ⑩ リ )

⑩ リ ⑪ リ  
⑨ リ ⑩ リ )

⑩ リ —  
⑨ リ ⑩ リ )

⑩ リ ⑪ リ  
⑨ リ ⑩ リ )

maruman Loose Lest.L795

注記は初等科音楽教育研究会編『初等科音楽教育法』音楽之友社2004年による  
注記は配布された資料に筆者（山田真紀）が加筆したものである。

参考資料 1 配布資料の内容（日本の音楽の授業にて）

イメージしやすいティリティリを自分で考えて用いましたけれども、今後は教科書の表記につなげていきたいと思っています。」

### 3. オーストラリアと日本の音楽の授業の比較

前稿では、オーストラリアの音楽の国家基準のうち、①子どもを音楽の生産者としてとらえ、子どもは作曲をしながら、それに必要な音楽の知識や技能を身につける、②子ども達は「作曲家」「演奏家」「聴衆」の3役割を演じながら、音楽の授業に参加し、音楽科のディシプリンを身に付けていく、という2つの特徴をもとに、それらの特徴が発揮される授業計画を立てるという作業を行った<sup>4)</sup>。そして、それらが実際にオーストラリアで行われている授業とどのくらい一致するのかを検証してみたいという期待を持ち、渡豪した。そこで参観できた現実には、以下の3つの特徴を持つものであった。

第一に、美しい合唱、見栄えのするパフォーマンスの完成を目指すという、いわゆる「作品主義」<sup>5)</sup>と見なすことのできる授業であった。NSW州のほとんどの学校では、学期末に音楽祭が催され、そこには保護者も招かれる。学期中の音楽の授業は、その準備という位置づけになっており、わずか12回の授業で、質の高いパフォーマンスを作り出すのは容易ではないため、授業のほとんどはその練習に費やされる。児童は、流行しているポップミュージックには関心を示すが、音楽の授業で扱われる「音楽」には、それほど強く動機づけられているようではない。そのため、学期末の音楽祭でクラスごとに発表する、それを学校中の先生や児童、保護者に見てもらおう、という外発的誘因により、子ども達の音楽に対する動機づけを高めているように感じられる。B先生は、パフォーマンスとして見栄えのよいボディーパーカッションやシロフォンの演奏を研究し、類似するパフォーマンスをYou tubeから検索して、児童に見せ、「こんな風にかっこよく演奏したい」という児童の気持ちをかきたてようとしていた。このようなB先生の努力の裏には、何もしなければ動機づけることのできない現実が垣間見られるような気がした。

第二に、オーストラリアの音楽の国家基準では、音楽の知識や技能を段階的に高めることが強調されていたが、今回参観した授業では、知識の伝達という要素はとても弱いものであった。ホワイトボードに楽譜は映し出されるものの、楽譜を読み取り、それを音で表すという作業はほとんど見られず、先生の模範演技や模範歌唱のあとに、児童が真似をし、それを繰り返すことで覚えさせていく、あるいは同じパートを担当する友達のやり方を横で真似ながら覚えていくという方法が用いられていた。音楽室の壁には、音階、音符の種類、音符とリコーダーの穴の押さえ方の図が掲示されていた。しかしながら、教科書のないオーストラリアでは、音楽の楽典をどこまで扱うかは、担当する教師の裁量に任せられ、扱い方には大きな差がありそうである。

第三に、参観した授業では「作曲家」「演奏家」「聴衆」のうち、児童は演奏家とし



での役割のみが求められ、作曲家としての要素は、5年生の授業においてアフリカの太鼓系の児童が、間奏において自分でアレンジしたリズムで太鼓をたたくことが求められていたところ以外には、全くその要素がみられなかった。「聴衆」という要素も、小グループごとに合唱や演奏して、それをお互いに聞きあうという方法は盛んに取り入れられていたものの、どちらかというと全員がしっかり演奏し、参加しているかを確認するためであり、お互いの合唱や演奏のよい点や改善点を見極め、自分たちの合唱や演奏に生かしていこうという導きはなかった。児童が「作曲家」として主体的・能動的に音楽に関わろうとする姿は理想的であるが、創造力がある子もない子も混乱なくやり遂げられるような授業案と教室環境を作り出すのは、容易ではない。この点で新しいアプローチを期待していた我々は、少しがっかりすることとなった。

次に、日本で参観した授業の特徴についてである。参観した授業は、以下の2つの特徴を持つものであった。第一に、45分間の授業のなかに、歌唱の練習、音符の種類とリズムの学習、リコーダーの演奏という3つの要素が組み込まれ、児童を飽きさせない盛りだくさんの内容で構成されていたこと。第二に、教師主導で、児童の集中力を途切れさせない、ほどよい緊張感のなかで進む授業のなかにも、児童が発展的に考えて発言したり、楽しく歌ったり演奏したりする要素が含まれていたことである。授業後のインタビューでY先生が言及していたように、楽しく、また真剣に音楽に取り組むことで、子ども達の情操や感受性は高まっていくという考え方が下敷きにある。日本の学習指導要領では、音楽は、音楽の知識や技能を育てるだけでなく、音楽を通して、豊かな情操や感性を持つ人間形成を図ることも目的としているが、音楽の授業のなかでは、それは「音楽の知識と技能を育てるパート」「豊かな情操や感性を育てるパート」というように分けて構成されるのではなく、両者は同じ学習の両側面であるにとらえる方法論で授業が組み立てられていることが理解できるものであった。

## おわりに

最後に、オーストラリアで参観した授業が、必ずしもオーストラリアの国家基準の特徴を反映した内容というわけではなかった理由について考えてみたい。今回、参観した授業は、指導力のあるB先生の導きにより、児童は楽しそうに音楽の授業を受けていたものの、児童が主体的に「音楽を作り出す」という要素はほとんど見られなかった。その背景には、教師が置かれた環境的制約と、オーストラリアの音楽が統合カリキュラムになっていることによる影響があるのではないと思われる。

第一に、教師が置かれた環境的制約についてである。オーストラリアでは音楽は週に1回の45分間、そして12週間の授業期間のなかで、学期末に行われる音楽祭で発表できる水準の演奏を完成させなければならない。この限られた時間のなかで教師は結果を出していかなければならないため、結果の見えやすい内容、指導しやすい内容

を授業に取り込み、結果が見えにくく、児童や教室のコントロールが難しくなるような、創意工夫や準備時間が非常に多く必要となるような内容は敬遠しがちになるのではないか。時間的制約のなかで分かりやすい成果を出すことが求められている環境下では、このようなことはどの国においても、またどの教科・領域においても起こりうることである。今回は、特別に準備された授業ではなく、教師も児童も普段着で日常的に行っている授業を見せていただいたことから、そのような教師をめぐる環境的制約による帰結が分かりやすく現れていた。

第二に、オーストラリアの音楽が統合カリキュラムになっていることによる影響である。オーストラリアの国家カリキュラムにおいては、ダンス・演劇・メディアアート・音楽・ヴィジュアルアートの5つの領域によって芸術領域が編成されており、音楽は芸術領域のうちの1つの領域という位置付けである。オーストラリアの芸術の統合カリキュラムについて研究をしている唐崎によれば、かつての州ごとのカリキュラム<sup>6)</sup>においては、「統合」の意味は多様であり、それぞれの分野の個性性を尊重しつつ、領域の大きなくくりとして芸術という看板を掲げている州もあれば、それぞれの分野にある共通性と個性性をうまく峻別して、ひとつの統合カリキュラムに作り上げようとする州もあるとのことである<sup>7)</sup>。特に後者の場合、芸術のクリエイティビティ（創造性）がすべての領域に求められ、ヴィジュアルアーツで児童が自分自身の作品を作るのと同じように、音楽にもそれが求められることとなり、それが「作曲」「自分の音楽の創造」という要素としてクローズアップされるようになる。しかしながら、オーストラリアの音楽の指導書の内容を研究している井内によれば、「作曲」の要素は、楽典の基礎の学習の方法としては小学校低学年では扱われず、音楽の指導書のなかでも、それほど多くの時間をさかれていないようである<sup>8)</sup>。

以上のような事情から、国家カリキュラムの願いや理念が、正確に授業実践に反映されていると期待するのは、そもそも難しい注文であったのかもしれない。

先行研究においては、国家カリキュラムや州レベルの公的カリキュラムの分析、指導書や教科書の分析が行われ、当該国の特徴が導きだされており、それはそれとして研究としての価値は高いのであるが、やはり、当該国の教育の特徴を正しく知るためには、実際にどのような実践が行われているのかを丁寧に観察し、そのデータを積み重ねることが不可欠である。実践は、教師によるカリキュラムの解釈、児童の実態、教師をめぐる時間的・環境的制約のなかで生み出されるものであり、国家カリキュラムから研究者がイメージするものと必ずしも一致するわけではないからである。

## 謝 辞

本研究のために、授業を参観させていただいたシドニー市のA小学校のB先生と児童のみなさん、名古屋市X小学校のY先生と児童のみなさんに、記して感謝の気持ちをお伝えしたい。

■参考文献・註

- 1) 山本朱莉・山田真紀「オーストラリアと日本の小学校音楽科の比較研究 その1—学習指導要領の比較から—」 梶山女学園大学教育学部『教育学部紀要』第8号, 2015年.
- 2) 唐崎裕子「オーストラリアの初等芸術科における統合カリキュラムに関する研究—ニューサウスウェールズ州 Creative Arts K-6 Syllabus の音楽分野に着目して—」中国四国教育学会『教育学研究紀要』55(2), 2009年, pp. 597-602.  
唐崎裕子「オーストラリアの初等芸術科における統合カリキュラムに関する研究—クイーンズランド州 Queensland Curriculum, Assessment and Reporting Framework の音楽分野に着目して—」中国四国教育学会『教育学研究紀要』56(1), 2010年, pp. 67-72.  
唐崎裕子「オーストラリアの初等教育における芸術科カリキュラムに関する研究—音楽分野を中心に—」 広島大学教育学部音楽文化教育学講座『音楽文化教育学研究紀要』(22・23), 2011年, pp. 99-106.
- 3) 井内志穂「オーストラリアの音楽教科書における基礎の内容に関する研究」中国四国教育学会『教育学研究紀要』57(2), 2011年, pp. 357-362.  
井内志穂「オーストラリアの芸術科カリキュラム(音楽)における多文化教育の視点: 初等段階に着目して」 広島大学教育学部音楽文化教育学講座『音楽文化教育学研究紀要』24号, 2012年, pp. 159-169.  
井内志穂「オーストラリアの初等音楽教育におけるテンポの学習内容に関する研究: Music Roomを中心に」中国四国教育学会『教育学研究紀要』58(2), 2012年, pp. 583-588.  
井内志穂「オーストラリアの初等音楽教育における強弱の学習内容と方法: 初等音楽教科書における基礎の内容に着目して」, 広島大学教育学部音楽文化教育学講座『音楽文化教育学研究紀要』25号, 2013年, pp. 155-160.
- 4) 山本・山田, 前掲論文.
- 5) 教師主導で見栄えのよい作品を作らせる指導の在り方を総称する概念である。
- 6) オーストラリアでは1994年から学習内容の国家基準を定める国家カリキュラムが制定されたが, 実際には各州・直轄区が制定する独自のカリキュラムによって授業が行われてきた。オーストラリアでは2008年より, 各州・直轄区で定めてきたカリキュラムを国家カリキュラムに統合することを意図して, 準備を開始し, 2014年からは全州・直轄区において国家カリキュラムに基づいた授業が行われることになった。
- 7) 唐崎 2011年, 前掲論文.
- 8) 井内 2011年, 2012年, 2013年, 前掲論文.